

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 28 日現在

機関番号：34511

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K01906

研究課題名(和文) 地域貢献としての「子ども食堂」の意義と役割

研究課題名(英文) Significance and role of "Children's cafeteria" as a contribution to the community

研究代表者

齋藤 美保子 (SAITO, Mihoko)

神戸女子大学・文学部・教授

研究者番号：20551708

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：2016年に子どもの貧困率が全国平均13.8%のところ鹿児島県では20.6%という全国でワースト3位が新聞報道され、「子どもの貧困」への認識が浸透していった。その受け皿としての「子ども食堂」であった。その後、行政・企業・社会福祉協議会・生協・教育委員会など、多様な方々からの支援も含め、子ども食堂は、よい食事バランスの提供や学習支援と結びつき、生活困窮者への支援のほか、理論的な研究業績としては、経済的支援・ボランティア育成・世代間交流・ケアリングのほか地域のコミュニティの役割を担っている。コロナ禍にあっても支援は続けられ、フードパントリー・食品ロスなど課題解決にも子ども食堂の役割は大きい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ボランティアの意識調査の分析・まとめに関して『森の玉里子ども食堂奮闘記』を出版し、行政・企業・社会福祉協議会・生協・教育委員会などの連携が行われ、県として子ども食堂への予算が付与された。理論的な研究業績としては、『子ども食堂における身近な自然体験活動の実践』『鹿児島県における子ども食堂のとりくみ』という論文と報告書を提出した。『鹿児島の子どもの貧困と子ども食堂の役割』を掲載し、広く子ども食堂の意義と役割を明示した。しかし、コロナ禍にあっても、子ども食堂は休店を余儀なくされ、「子ども食堂と食品ロス」を大学研究紀要に掲載し、「ケアリングとしての子ども食堂」として、三学社から出版。

研究成果の概要(英文)：In 2016, the poverty rate of children was 13.8% on average nationwide, but in Kagoshima prefecture it was 20.6%, which was the third worst in the nation, and the awareness of "child poverty" became widespread. It was a "children's cafeteria" as a saucer. After that, the children's cafeteria, including support from various people such as the government, companies, social welfare councils, co-ops, and educational committees, was linked to providing a good dietary balance and learning support, in addition to supporting people in need. As a theoretical research achievement, it plays a role of local community in addition to financial support, volunteer training, intergenerational exchange, and caring.

Support continues even in the event of Corona-ka, and the children's cafeteria plays a major role in solving problems such as food pantry and food loss.

研究分野：家庭科教育学

キーワード：貧困 子どもの貧困 子ども食堂 ボランティア 世代間交流 コミュニティ ケアリング 地域貢献

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 子どもの貧困の状況

子どもの貧困率が世界的に問題となった頃、2008年に阿部彩の『子どもの貧困』が岩波から出版された。同時に OECD 加盟国 30 か国中日本は最下位の 30 位であったことを『児童学研究』で私は明示してきた。当時子どもの貧困率は 15.7%であり、子どもが満足に食べられない状況があることに対して、こんな豊かな国にそんなことがあるはずはない、という意識が蔓延していた。その後、2016年に子どもの貧困率が全国平均 13.8%のところ鹿児島県では 20.6%という全国でワースト 3 位が新聞報道され、ようやく「子どもの貧困」への認識が浸透していった。その受け皿として立ち上がったのが「子ども食堂」である。

(2) 子ども食堂の状況

鹿児島県で早くから私は子ども食堂発起人の一人及び研究者という立場と運営者という両方から「子ども食堂」についての研究を進めることになった。また、「子ども食堂」について聞いたこともない人がほとんどの時代であった。「『貧困』というだけで、ここでは大変困る。よそでやってくれ」「貧困」ではないのでパンフレットは配布しない、あるいは破棄されたなど、子ども食堂運営者から相談を受けた。また、公民館など使用するなら、使用料金と修繕を要求されたなど、子ども食堂への理解がなく、また非協力的であった。2016年当時の鹿児島県の子ども食堂は 4 か所であった。

2. 研究の目的

(1) 学習や生活支援としての役割の効果について可視化し、子ども食堂をさらに地域に根付かせるため、地域貢献における「子ども食堂」の意義と役割を実践的理論的に明示することが目的である。具体的には以下 3 点を行う。文献の整理、各種意識調査、子ども食堂の運営の実践とその意義である。

(2) 2020年からの「コロナ禍」では、「緊急事態宣言」のもと、三密防止のため「子ども食堂」は開店できない状況に陥った。状況変化のため、子ども食堂の運営者から、「フードパントリー」「ドライブスルー」「フードドライブ」という形態から「子ども食堂」と子どもへの支援対策として「子ども食堂と食品ロス」を論じることを目的とする。

(3) さらに、貧困対策だけでなく、「ケアリング」について明らかにする。

3. 研究の方法

(1) の文献調査は、学術文献を行う。地域住民・学童指導員・家庭科教員の生活意識調査を行った。調査内容は、子どもの生活環境と「かごしまこども調査」から読み取れるもの、子ども食堂への期待など中心に調査・分析を進める。②学童保育職員の意識調査 ③子ども食堂の運営・実践者による報告作成

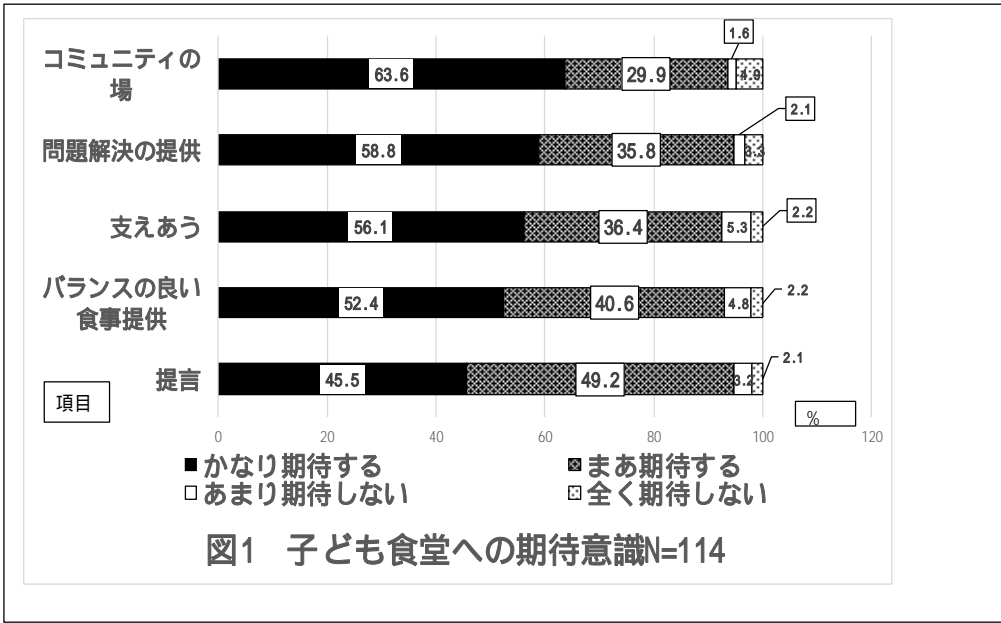
(2) コロナ禍では、ドライブスルーやフードパントリーを行っている子ども食堂の運営者の報告と「食品ロス」について論じること、広く子ども食堂の認知のため、子ども食堂カレンダーの作成である。

(3) インタビューからケアリング・世代間交流・コミュニティについて述べる。

4. 研究成果

(1) 家庭科教員による意識調査は学習面では「教科書購入代金を振り込めない」、食生活面では、「弁当持参が少なくコンビニ弁当」「カップヌードル」など炭水化物が中心であるという結果であった。進路指導では、「経済面で進学を断念」など赤裸々な内容であった。「かごしまこども調査」では等価か処分所得中央値を基準とし、A世帯 122万円未満、B世帯 122万円から 244万円、C世帯は 244万円以上とした。その結果、母子家庭・父子家庭とも約 80%となり、かなり厳しい状況であった。子どもから経済的な理由で進路については答えられことが「ある」世帯が A世帯が半数以上の 54.3%で、B世帯が 42.8%、C世帯が 20.5%と収入における格差があることが分かる。医療機関の受診が「ためらう」ことがあると答えた A世帯は 32.3%に及び B世帯が 20.1%、C世帯が 6.8%と親の収入による格差が散見できた。

2017年10月15日、「広がれ、こども食堂の輪！ in かごしま」と題する講演会の会場で参加者の意識調査を行った。このイベントの目的は「子ども食堂」の周知にあり、同時に子ども食堂への理解と啓発にあった。参加者 350人を対象に調査用紙を配布し、187人から回答を得た(回収率 53.4%)。質問内容は「子ども食堂設置への意識」と「子ども食堂への期待」の 2 つである。結果は「支援するのはよいこと」に対して「かなりそう思う」が 133人(71.1%)、「まあそう思う」が 48人(25.7%)であり、全体で 96.8%にもなった。以下、「子どもや保護者が元気になってくれる」も 95.7%になり、子ども食堂設置への意識については、おおむね好感を持っていると考えられる。

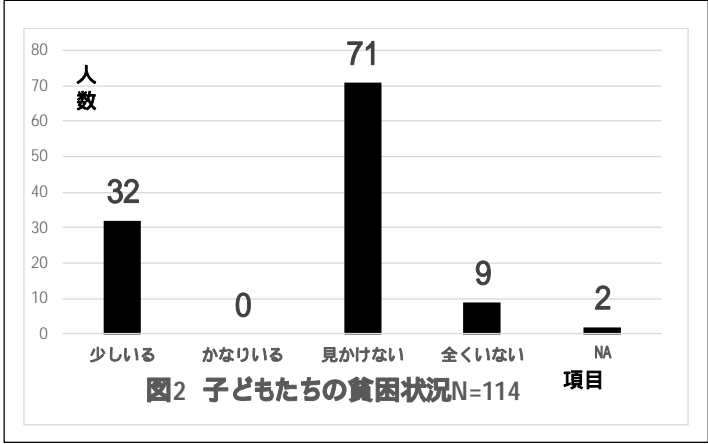


いずれの項目も「かなり期待する」「まあ期待する」の合計が約 95%であった。次に子ども食堂の役割についてもおおむね来場者は期待していると言える(図 1)。詳細についてみると、子ども食堂を「コミュニティの場」としている点が注目される。核家族が日本全体で7割に達した現在、子育て世代が「孤立」に追い込まれている。それは地域からの孤立であり、親にも相談できない状況にあるからである。それに対して、受け皿として「地域」があるが、街づくりとしての子ども食堂は一翼を担えると考えられる。

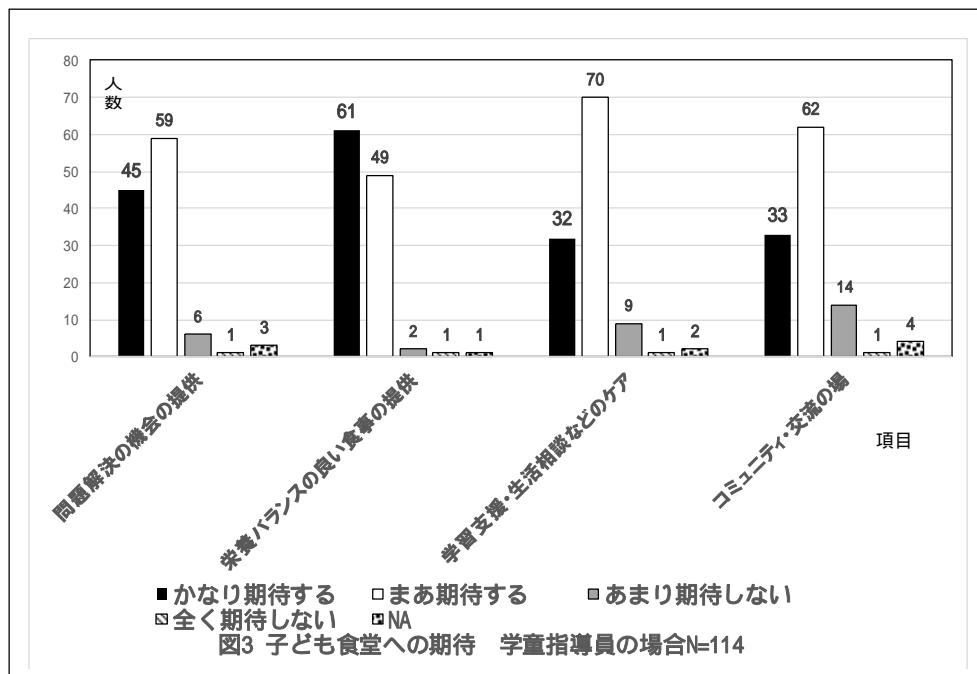
学童保育職員 114 名調査

質問項目は、1.暮らし向きの傾向 2.子どもの状況 3.子ども食堂への意識 のみを明示する。

1.暮らし向きの傾向はについて尋ねたところ、ほとんどが「あまりない」「まったくない」が全体の 78 名(68%)で、「かなりある」「ある」合計が 32 名(28%)だった。学童保育職員は、経済的悪化は意識としてはないようである。この上で、子どもたちの状況について尋ねたところ、「貧困」と思われる子どもがいるかどうか尋ねたところ、「少しいる」が 32 名(28%)、「みかけない」「まったくない」合計 80 名(70%)であった(図 2)。



3. 子ども食堂への期待に関して尋ねたところ、以下ようになった(図3)。



学童指導員の場合の意識について、「子ども食堂に期待すること」として4項目を挙げ、それぞれについて、「かなり期待する」「まあ期待する」「あまり期待しない」「まったく期待しない」について質問をした。結果として、「問題解決の機会の場」が「かなり期待する」「まあ期待する」が109名(91%)、「栄養バランスの良い食事の提供」が「かなり期待する」「まあ期待する」が110名(96%)、「学習支援・生活相談などのケア」は、「かなり期待する」「まあ期待する」合計102(89%)、「コミュニティ・交流の場」には、「かなり期待する」「まあ期待する」の合計が95名(83%)であった。

このように、イベント来場者と同じく、子ども食堂をかなりの期待として思っていることが分かった。

子ども食堂運営者・実践者による報告者は6名に及んだ。

表 子ども食堂の活動

	代表	子ども食堂の名前	主な活動
1	田中かすみ	ほしがみね みんなの食堂	平和教育
2	古里なおみ	しいちゃん家	地域活動
3	松木蘭利範	伊集院子どもふれ愛食堂	フードバンク・フードパントリー・農業体験
4	榊 一信	こども食堂たらの芽会	生活困窮者支援・個人ロッカー設置
5	松元弘子	なかず子ども食堂	ドライブスルー・ハロウィン
6	齋藤美保子	森の玉里子ども食堂	身近な自然体験活動 吉岡敦之

以上のように、平和教育、地域に根差した子ども食堂、自然体験、農業体験やドライブスルーとハロウィンなど、多様な活動やイベントを定期的に行っている。特に榊氏による生活困窮者におけるロッカー設置の支援はNHKにも取材された。約900世帯・3,000人を超える支援活動を行っている。

鹿児島での子ども食堂の活躍は、コロナ禍でも引き継がれ、2021年度南日本放送からMBC賞を受賞した。

(2)子ども食堂の休店によるフードバンクの支援と食品ロスに関しては、食品ロスが授業系・家庭系がそれぞれ全体の1/2を占め、いわゆる食品ロスが多い。ゴミの総廃棄出量が4,272万トン(東京ドーム約115杯分)、1人1日当たりのごみ排出量は918グラムで、経済的負担は老いも若きも約4万円(年間)相当に当たる。しかし、食品ロス法案の課題から考察すると、別の資料でもいわゆる3分の1ルールということがある。これは、メーカーから小売店までの納品期限が、製造日から賞味期限までの期間を3等分して商慣習としていることである。それに間に合わなく、返品されるのが約562億円である。これはアメリカやフランスの3か月と4か月に対して、日本は2か月という短いということがあげられる。また、賞味期間を6か月から8か月に延ばすこととなった。また、表示を「月日」から「月」までとしたことにより、食品ロスが少なくなるように大幅に緩和したことである。だが「賞味期間が長い」ということの中身である。

特に酸化防止剤、保存料などが添加されている場合は、それらが入っていない場合よりも少なくとも1か月は食品が保たれているであろう。こうした場合、不要な添加物だらけにますます拍車がかかるといことはありうることである。さらに、表示が「月日」から「月」と表示し、賞味期限を長くし、あいまいにしていることである。また、加工食品と生鮮品の区別すべきことを混同してしまっていることである。加工品の場合は上記で、「賞味期限」「添加物」という問題があることは述べた。生鮮品の場合、例えば大根やキュウリにしても、形状の問題や供給過多の場合など、状況が複雑であり、消費者だけの問題にすり替えられてしまっている。確かにキュウリや白菜の形状が悪く、消費者が購入しないということはあるが、安くすることにより、気にせず、買う人もいる。むしろ、納品段階で形状が不相当と判断されて廃棄される場合がほとんどと推察され、データがないことも問題である。

もう一つ大きな問題は、食品ロス削減に関して受け入れ先を「生活困窮者」「子ども食堂」に食料を・食品を供給する、というあらゆる手段で支援することは、大変意義深いことである。ただ、全部享受してよいかは問題が残る。別の問題としては、次の3つにあると言える。一つは、この支援する人・組織が誰ということである。それには以前から活動し、生活困窮者支援という理念で活動してきた「フードバンク」があげられる。ただ、フードバンクも、生鮮魚・生鮮野菜は扱わない 輸送代など財政の問題 ボランティアの確保などがあり、各県や地域によって格差があることは否めない。それでも活動している善意のフードバンクの人たちが多く、本稿で取り上げた次第である。

また、子ども食堂カレンダー作成は研究機関の助成も得て、無事4,500部作成し、各子ども食堂に配布できた。

(3)今日、子ども食堂の役割は多様に富み、食事だけでなく、学習や文化の交流の場でもある。鹿児島でも早くから立ち上げた子ども食堂の中でも、高校生から高齢者のボランティアが多く、しかも利用者が多様な世代にわたる子ども食堂を事例としている。高齢者のボランティアは、子ども食堂の運営 会場の設営、食材の提供・運搬、調理、調理の配膳、読み聞かせやコンサート、後片付け など多岐にわたり中心的存在である。若い大学生は運営もし、子どもの学習支援をし、頼もしい存在である。高校生は、運営というよりは、よき子どもの遊び相手であり、自らの居場所をここに見出して通う場合が多い。一方、高齢者のインタビューからも、子ども食堂への期待と楽しみが伺えられた。特に孫世代の子どもの相手をすることで充実感が得られ、ケアを中心としたコミュニティを支えている。以上どの世代でも「ケアリング」がみられ、乳幼児から高齢者まで食事や文化、コミュニケーションを介しての交流の場となっている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 齋藤美保子	4. 巻 34
2. 論文標題 子ども食堂と食品ロスの問題について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 神戸女子大学文学部教育学科「教育諸学研究」	6. 最初と最後の頁 107-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉岡敦之・齋藤美保子	4. 巻 28
2. 論文標題 子ども食堂における身近な自然体験活動の実践	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 47-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中かすみ・古里なおみ・齋藤美保子	4. 巻 28
2. 論文標題 鹿児島県における子ども食堂のとのくみ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要	6. 最初と最後の頁 171-180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤美保子	4. 巻 211号
2. 論文標題 子ども食堂の役割	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 自治研かごしま	6. 最初と最後の頁 20-27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 齋藤美保子	4. 巻 18号
2. 論文標題 子ども食堂における異世代交流ー老いも若きも、みんなで食べよう!語るう!	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 世代間交流ー老いも若きも子どももー	6. 最初と最後の頁 19-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計2件

1. 著者名 増田彰則編著	4. 発行年 2019年
2. 出版社 南日本新聞社	5. 総ページ数 280
3. 書名 危機にある子育て環境	

1. 著者名 齋藤美保子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 南日本出版	5. 総ページ数 153
3. 書名 森の玉里子ども食堂奮闘記	

〔産業財産権〕

〔その他〕

学会発表はなかったもの、「子ども食堂」「子どもの貧困」に関する講演会を15回以上行ってきている。

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------